

小麦新品種「びわほなみ」の 後期重点施肥体系による収量の向上

東近江農業普及指導センター

【普及活動のねらい・対象】

対象のY氏は約60haの経営面積を持つ大規模土地利用型農家で、小麦は約19haを栽培されています。令和2年産から多収品種の「びわほなみ」を栽培されましたが、令和3年産の収量は331kg/10aと、JAグリーン近江管内の平均収量360kg/10aを下回りました。原因として、Y氏のほ場は砂地が多いため、生育後半まで肥効が維持出来ていないことが考えられました。

そこで、令和4年産では生育後半まで肥効が維持できる3種類の「後期重点施肥体系」を検討した結果、380kg/10a～420kg/10aの収量が確保できることが分かりました。さらに、令和5年産では砂地ほ場全面で施肥体系を切り換えて、多収となるよう支援しました。

【普及活動の内容】

令和5年産では、令和4年産に設定した3種類の後期重点施肥体系の中で、最も収益性の高かった施肥体系（基肥：国産化成肥料444 20kg/10a－穂肥：尿素40kg/10a）の導入を提案し、技術支援を行いました。後期重点施肥体系では、穂肥の施用時期となる茎立期の判断が重要なポイントとなります。そこで、Y氏とほ場ごとに生育状況を確認しながら、適期に穂肥施用が行えるよう支援しました。また、令和5年産の栽培結果から、令和6年産以降の砂地における「びわほなみ」の施肥体系の確立を目指しました。



写真1 穂肥施用作業

【普及活動の成果】

技術支援を通して、Y氏は穂肥の施用時期の判断方法を習得され、2月9日～2月15日に実施された結果、令和5年産「びわほなみ」の収量は390kg/10aとなり、JAグリーン近江管内の平均収量360kg/10aを上回ることができました。後期重点施肥体系による増収を確認できたことから、令和6年産以降も砂地ほ場全面で後期重点施肥体系に取り組まれることとなり、対象のほ場に適した施肥体系を確立することができました。

◎対象者の意見

さらなる増収を目指し、今後も小麦栽培に取り組んでいきたいです。（生産者Y氏）